

エヴゲーニイ・ヴォドラスキン氏滞在記

柔らかく、けれども固く

エヴゲーニイ・ヴォドラスキン

翻訳 奈倉 有里

この春、私は妻とともに二週間にわたり日本に滞在した。日本もロシアと同じで春の到来が遅れたため、私たちは満開の桜を目にすることはできなかった。講演をしたり人と会ったりするために六つの地域をまわったが、どこへ行っても今年の桜はストライキでも起こしているかのようにつぼみのままだった。もちろん、なかには咲いている桜も二〜三本あったが、期待していた満開の迫力には程遠い。けれどもそれ以外は、すべてが期待通りだった。

毎日、二人のヴォランティアが迎えに来て、至れり尽くせりの世話をしてくれた。美術館や寺院に案内され、温泉につかり、浴衣を着、高級なブティックから100円ショップ（日本在住のロシア人は100円ショップを好み「ストエンカ стойенка」と呼んでいる）までさまざまな場所に行った。日本の温暖な気候は、私の知っている地域のなかで比べるとセルビアくらいの感じだが、セルビアには温泉はなく（まだ掘り当てていないだけだろうか？）、浴衣もない。

ほかにセルビアともロシアとも違うのは、どこへ行ってもチップの習慣がまったくないということだ。想像しがたいことかもしれないが、たとえばタクシーに乗ってお札で支払うと、運転手は1円単位まできっちりとお釣りを返してくれる。それを受け取るのをこちらが断る瞬間を待つわけでもなく、小銭がないと言って怒ることもなく、ただお釣りを渡し、運転席に座ったままボタン操作ひとつで後ろのドアを開けてくれる。レストランの支払いはもっと不思議だ。ウェイターが持ってきてくれた勘定を自分で出口付近のレジに持って行ってお金を払うのである。

私がかつとも感銘を受けたのは、日本人の貴族性である。私はずっと、彼らの話し方や動作を観察していた——貴族的である。例を挙げよう。東に行くほど話し声が大きくなるという、有名な法則がある。しかし日本は東も東、最東端だというのに、静かに話す。ロシア人より静かだ。特に女性が。日本の女性というのは、また別のテーマになってしまうけれど。しかし驚くほどきれいで、服のセンスもいい。そして若い。日本の女性を見ると、年齢がまったくわからないことがある。17歳なのか47歳なのかさえわからないの

だ。50 を過ぎるとやはり、さすがの日本人でも、まあわかりきったことではあるが。

さて、いちばん大事なこと——文学についても書いておこう。日本人がなにをどう読んでいるかということについて、ひとつの事実を提示しておきたい。少し前に『カラマーゾフの兄弟』の新訳がでたという。それが瞬く間にミリオンヒットのベストセラーとなった。繰り返しになるが——100 万部である。いま生きて世界的に活躍している日本人作家の多さ（カズオ・イシグロ、村上春樹、ルース・オゼキなど¹）を考へても、世界文学地図のなかで、日本は偉大な文学大国であるといえよう。

私たちが日本を訪れる直接のきっかけとなったのは、『ラヴル』日本語訳²の出版だった。この翻訳を私がしっかり理解したと言へば、それは言い過ぎになってしまう。それでも、私はその本を手にし（漢字にはとても好感を持っている）、日本の私の研究仲間の感想を聞いて、日本語版の特徴についてある程度理解はしたつもりだ。最も際立った特徴としては、原書には現代語と古代ロシア語のテキストを使った遊びがあるのに対し、日本語版『ラヴル』は現代語だけで書かれていることが挙げられる。もちろん日本語の訳者に古代ロシア語を再現してほしいわけではないが、日本語の古語を用いるのがよかつたのではないだろうか。

一般に lost in translation と呼ばれるものは、確かに翻訳にはつきものだ。しかし単語が三つ抜けたとか、もとはいいフレーズだったものが、翻訳ではその構造的な要素が消えてしまった、といったことならばまだいいのだが。私は落胆しかけた。しかしそのとき、ある賢い日本の研究仲間がそれを止めてくれた。彼は、日本語訳の全体の叙述は間違いなく良いものだという。そしてもし翻訳で日本の歴史的・文化的背景を背負った古語を使ってしまうと、ロシア語原文の文体実験が、正確に理解されない恐れもあるという。たしかに、それはそうだ。たとえばことわざを翻訳するとき、逐語的にではなく翻訳先の言語のことわざを用いて翻訳したほうが、読むほうはそれをことわざとして理解することができる。また別の研究者は、もし日本語の古語を使ったりしたら、主人公はロシアの聖愚者ではなく、仏教徒か神道の信者になってしまうかもしれない、とも言っていた。

帰国の少し前に、かの有名な「石庭」を訪れた。砂利を敷き詰めた平坦な庭に、大小15の石が置かれている。この庭のポイントは、どこから見ても14個までしか見えないようにできているということだ。残り1つの石は、常にほかの石に隠れている。同じように、どんなに当たり前のように思えることでも、わからないことはある、ということらしい。

前に一度、日本語からロシア語に翻訳されたテキストの編集を担当したことがあった。そのなかで、ある人がもう一人の人に答えた、という文脈で、逐語的に「柔らかく、しかし固く [きっぱりと]」答えた、という訳語があった。私は編集者の反射的な判断でこのフレーズを削除したほうがいいのではないかと考えたが、そのとき突然そのフレーズの美

しさが見えて、やめた。なにかを柔らかく、けれどもきっぱりと答えるためには、なんと強く、賢くなくてはならないのだろう。私は柔らかく話したり、きっぱりと話したりすることはできるが、どちらも同時にとなると、わからない……。

そういう人たちとはつきあってみたいものだ。柔らかい物腰で相手に話しながら、十何年も自分の意志を固く持ち続けるような。こんにちの日本の開放性をもってしても、彼らは自らの根に対する興味を失わず、日本の木はグローバリズムの非情な波にも流されなかった。小説を翻訳するにしても、他者である原作者を喜ばせることよりも、日本の読者にわかるように訳したのも、そういうことなのかもしれない。日本人が閉鎖的だとは感じなかったが、彼らはいつも、あの見えない15番目の石を持っている。私たちは普段から、彼らを隣人と呼んでいる——ペテルブルグにいるときでさえも。少し離れたところにながら。

解説

奈倉 有里

2017年3月、『聖愚者ラヴル』（日下部陽介訳、作品社）の翻訳出版にともない、ロシアの作家であるエヴゲーニイ・ヴォドラスキン氏が来日した。氏は各地をまわり、書店や大学などで講演を行った。東京大学では2017年3月19日（日）、亀山郁夫、島田雅彦、沼野充義の四名の登壇によりシンポジウムが開催された。³

講演では、まず中世文学の特徴として「断片性」や「作者の匿名性」に触れ、現代のロシア文学において類似の現象がみられることを指摘した。ポストモダン文学におけるさまざまなテキストの引用、バルトが「作者の死」と呼んだ、テキストにおける作者の役割を最小化する見方の発生、アンソロジーの流行、ノンフィクションへの関心の高まり、テキストの無形性などがそれであるという。『ラヴル』は、現代文学がそういった状況に置かれているときに生まれ、そして評価されたが、これは決してポストモダン小説ではない、というのが氏の主張であった。

ヴォドラスキン氏はもともとロシア科学アカデミー・プーシキン館の中世ロシア文学研究者でもあり、専門的な知識も交えてお話しされた講演に対して、ゲストの亀山氏からは文学のもつ精神性や自然観について、島田氏からは聖愚者のシャーマニズムや作中に描かれるユニークな時間論について、沼野氏からは時間と愛と言語についての質問やコメントがなされた。

今回のエッセイ『柔らかく、けれども固く』は、帰国後に滞在の感想として送っていたものである。アテンドをしてくださった方々への感謝、タクシーやレストランの支払いのエピソード、日本語訳の感想などが盛り込まれていて、氏の受けた心証がよく伝わってくるが、ひとつだけ、石庭の15番目の石の解釈について書かれたラストの部分については、その言語背景について若干の解説を加えなければならぬだろう。

一般に、石庭の「見えない15番目の石」の意味は見る者の解釈に委ねられると言われている。個人的な話になるが、私をはじめ石庭を訪れたときに感じたのは、完成してお未だの印象を残そうとする芸術の志向であった。見えない石は完成に向かう希求であり、それが見えない自らを戒めつつより良いものに向かおうとする精神的欲求であった。

だから今回、石庭の「見えない石」を、表向きは穏やかに接しながらも常に心の奥底までは見せないような「日本人の特性」と結びつけたこのエッセイの結末を読んだとき、一瞬、戸惑いがあった。しかしロシア語で考えてみると、これが実に自然な解釈のようにも

思える。どういうことだろうか。

ここでヴォドラスキン氏の解釈に（おそらく無意識的に）影響を与えたのは、ロシア語において一般的に普及している «держатъ камень за пазухой» 「懐に石を隠し持つ」ということわざで、これは「身近な者に対して、口に出さない秘密を隠し持つ」という意味で用いられる。「物腰の柔らかさと意志の固さ」という「日本人」に対するイメージと、石庭の15番目の石とが重なることにより導き出された解釈が、いつの間にかロシアのことわざのようになってきているのだから、言語と概念との結びつきは、やはり一筋縄ではない。

文化的な背景を持った言葉の翻訳の難しさに触れたこの紀行文の結末が、はからずもその難しさを体現するものとなったことに、氏の作品から得た複合的な印象にも通じる不思議な感銘を覚えた。

注

1. カズオ・イシグロ（1954 -）、ルース・オゼキ（1956 -、邦訳は『あるときの物語』（田中文訳、早川書房）など）ともに英語作家であり、ヴォドラスキン氏もそのことはよく知っているはずだが、こういった作家たちも含めて広く日本文学を捉えていることが分かって興味深い。
2. 邦訳『聖愚者ラヴル』（日下部陽介訳、作品社）
3. シンポジウムの詳細は〈すばる〉集英社、2017年12月号に掲載。